

令和 2 年 6 月 11 日現在

機関番号：32607

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K04450

研究課題名(和文)心理支援を要する学生の特徴とその経年変化及び自死の危機要因に関する横断・縦断研究

研究課題名(英文) A cross-sectional and longitudinal study about the character of the university students who needed psychological support, their changes of psychological state with time, and suicidal risk factors

研究代表者

山田 裕子 (Yamada, Yuko)

北里大学・健康管理センター・准教授

研究者番号：80626812

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、心理支援を要するハイリスク学生(以下、HR学生)及び自殺の危険性を有した学生の特徴を明らかにすることである。研究代表者らはK10をスクリーナーとした「こころの健康調査」を作成した。2016年から毎年度、北里大学相模原キャンパス所属の全学部生にその調査を実施し、カウンセラーがHR学生に呼出面接を行なった。2016年度の実践をベースに、2017年度には、こころの健康調査の実施とHR学生への呼出面接を中心としたアウトリーチ活動を全学的な取組としてシステム化し、毎年度継続的に行う体制を整えた。今後は、2017～2019年度の調査とアウトリーチ活動から得たデータを分析し、発表を目指す。

研究成果の学術的意義や社会的意義

精神健康のスクリーニング調査は多くの大学でその方法を模索しているが、学生相談室が組織的に実施している施設は少ない。研究代表者らは、心理支援を要しながらも自ら相談機関を利用しない学生の早期発見・早期対応を目指し、スクリーニング調査を大学全体の取組に発展させた実践例を提示している。この実践研究は、他大学でも参考にいただけるものとする。今後は、本研究で得られたデータを基に、K10陽性判定の学生群、その中から心理的支援に繋がった学生群、自殺のリスクを有した学生群それぞれの特徴を探究し、心理支援を要する学生の早期発見に有益な情報の発信を目指す。

研究成果の概要(英文)：The present study aimed to elucidate the character of the university students who were positive in K10 and needed psychological support, and who were at high level of suicidal tendencies. We created a questionnaire for asking students about psychological state, in which including K10. With respect to each school year since 2016, we conducted the questionnaire to all undergraduates who belonged to Sagami-hara Campus, Kitasato University. After the survey, we invited students, who received more than 15 points in K10 in the questionnaire, to an interview with a counselor. The counselors assessed the students' psychological state and their health through the interview. Since 2017, we have established the system that all departments cooperate with this annual survey, and that help us to continue this reaching-out activity every year. Now we are going to analyze the data being acquired from the surveys and reaching-out activities in 2017-2019, and plan to report the results.

研究分野：学生相談、青年心理学

キーワード：こころの健康調査 自殺予防 スクリーニング調査 アウトリーチ 心理支援を要する学生 ニーズの掘り起こし 自殺のリスク要因 横断・縦断研究

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

## 1. 研究開始当初の背景

日本学生相談学会が2014年に発行した『学生の自殺防止のためのガイドライン』によると、大学生の近年の自殺率は高い位置で推移しており、自殺予防は高等教育機関における喫緊の課題である<sup>1)</sup>。自殺防止のためには、心理支援を必要とする学生の早期発見・対応が重要であり、その実践の一つとして、精神健康のスクリーニング調査とその結果を基に専門家との面接を行う取り組みが挙げられる。スクリーニング調査は、参加者に対してより積極的に問題の認識を促すことから、予防的な効果が期待される方法である一方<sup>2)</sup>、実施している大学は全体の29%と割合が低く<sup>3)</sup>、その目的や方法も大学によって異なっている。また、その多くが臨床実践を行うに留まり、心理支援を要する学生や自殺の危機状況にある学生の特徴の解明には至っていない。大学ではよりシステマティックな自殺防止対策の構築が求められており、そのためには、心理支援を要する学生の特徴とその継時的変化を解き明かすこと、ならびに、自殺の危機状況にある学生の特徴と危機状況に陥る影響要因について明らかにすることが急務となっている。

研究代表者らは、2011～2015年度にかけて、北里大学新生を対象に精神健康に関する調査を実施し、2012～2015年度は学生相談室からの連絡に同意した学生に対して呼出面接を行った。呼出面接で学生相談室の利用に繋がった学生は、自殺やうつリスク高群の方がリスク低群よりも割合的に高かった( $p<.01$ )<sup>4)</sup>。また、「呼び出されたから学生相談室にくることができた」と述べた学生も複数存在し、心理支援ニーズを有する学生の早期発見・対応に一定の効果があることが示唆された<sup>4)</sup>。一方、リスク高群のうち、90%以上の学生が学生相談室からの連絡に同意しないことが明らかとなり、心理支援を要しながらも援助要請しない学生への対応に課題があることが判明した。研究代表者らは、この取り組みを改良すると共に、対象を全学部生に拡大し、大学生の自殺予防対策としてシステム化することを目指した。また、心理支援を要する学生の早期発見・早期介入という臨床実践を行う一方で、心理支援を要する学生の特徴、ひいては、自殺の危機状態にある学生の特徴を明らかにすることを目指し、本研究の着想に至った。

## 2. 研究の目的

本研究において、研究期間内に明らかにしたいと考えていたことは、以下の3点である。

(1) **K10**得点及び呼出面接で心理支援が必要と判断された学生の特徴について明らかにする。

年度ごとのこころの健康調査と呼出面接時の調査結果から、心理支援を要する学生の特徴を明らかにする。

(2) 心理支援を要する学生の継時的変化について明らかにする。

2016～2019年度の4ないしは3時点で測定した**K10**の得点の変化と生活習慣及び心配事との関連について、潜在成長モデルを用いて検討する。

(3) 自殺の危機状況にある学生の特徴および影響要因を明らかにする。

心理支援を要し、かつ、自殺の危機状況にある学生複数名の動向を経年的に追跡調査し、質的分析により、自死の危機状況に陥るリスク要因や影響要因について明らかにする。

## 3. 研究の方法

### 研究の準備段階

研究代表者らは、**K10**をスクリーナーとして独自に『こころの健康に関する調査』(以下、こころの健康調査)質問紙を作成した。2016年4月に北里大学相模原キャンパス所属の全学部生を対象にこころの健康調査を実施し、同年4～6月にかけて、**K10**陽性判定の学生(以下、**HR**者;ハイリスク者)を中心に、心理支援を要する可能性が高いと思われる学生の呼出面接を行った<sup>5)</sup>。その結果に基づき、2017年度には、こころの健康調査の実施と**HR**者への呼出面接を中心としたアウトリーチ活動を全学的な取り組みとしてシステム化し、毎年度継続的に実施する体制を整えた。

### 研究1 こころの健康調査

2017～2019年度にかけて、毎年度4月に、各学部事務職員の協力を得て、北里大学相模原キャンパス所属の全学部生(薬学部、獣医学部、医学部、海洋生命科学部、看護学部、理学部、医療衛生学部の計7学部で、薬学部と獣医学部は1年生のみ)に対して、こころの健康調査を実施した。

#### (1) 2017年度

対象：2017年4月に北里大学相模原キャンパスに在籍していた全学部生 5,235名

方法：各学部の新入生オリエンテーション及び2～6年生の新学年ガイダンスにて、各学部事務職員の協力を得て、こころの健康調査を実施した。

調査内容：属性(学部学科専攻、学年、性別、年齢、入学、入試、住居)、生活習慣(運動、食生活、食欲、睡眠、飲酒について)、基本的信頼(コンピテンス、自律性、関係性の3項目7件法)、自尊感情(**Rosenberg**自尊感情尺度、10項目4件法、得点範囲:10～40点)、**K10**<sup>6)</sup>(**Kessler10**:精神健康度のスクリーニング検査、10項目5件法、得点範囲:0～40点、カットオフ値14/15点)、学生生活上の困り事(勉強、性格や適性、友人恋人関係、体調、家族、大学の考え方、性、日常的ストレス、教職員関係、専攻違和、精神的しんどさ、将来進路、経済について、13項目4件法)、学生相談室利用希望(1項目4件法)、回答内容の研究利用に対する同意の有無

## (2) 2018年度

対象：2018年4月に北里大学相模原キャンパスに在籍していた全学部生 5,245名

方法：(1) 2017年度に同じ。

調査内容：(1) 2017年度に同じ。

## (3) 2019年度

対象：2019年4月に北里大学相模原キャンパスに在籍していた全学部生 5,268名

方法：(1) 2017年度に同じ。

調査内容：(1) 2017年度に同じ。

## 研究2 心理支援対象学生の呼出面接

調査1において、K10合計得点が15点以上のHR者を心理支援対象学生とした。

### (1) 2017年度

対象：HR者で回答内容の研究利用に同意した学生 507名

方法：こころの健康調査用紙に学生が記入した氏名と携帯電話番号を基に、K10合計得点の高得点者から順に、学生相談カウンセラー(以下、Co)から電話で連絡した。応答した学生に調査結果の確認という目的で来室を促し、応じた学生に対して、学生相談室で呼出面接を実施した。心理支援対象学生は、来室時に以下の内容を含む質問用紙に回答した上で、こころの健康調査での回答と比較しながら、結果のフィードバックを行い、学生の当時と来室時の状況について確認した。Coは、学生の自殺や自傷他害の危機状況の程度や心理支援ニーズ等についてアセスメントし、必要に応じて継続相談や医療機関受診などの支援に繋げた。

調査内容：背景情報(家族構成、医療受診歴など)、生活習慣(研究1に同じ)、心の健康自己評価票(8項目2件法)、K10(研究1に同じ)、学生生活上の困り事(研究1に同じ)

呼出面接でのCo判断(自殺・自傷他害リスク、5件法；学生の継続相談ニーズ、5件法；心理支援必要性のCo判断、5件法；校医医療紹介有無)

### (2) 2018年度

対象：HR者で回答内容の研究利用に同意した学生 471名

方法：(1) 2017年度に同じ。

調査内容：(1) 2017年度に同じ。

### (3) 2019年度

対象：HR者で回答内容の研究利用に同意した学生 398名

方法：(1) 2017年度に同じ。

調査内容：(1) 2017年度に同じ。

## 研究3 心理支援を要し、かつ、自殺の危機状況を経験した学生の追跡調査

研究期間中に、心理支援を要し、かつ、自殺リスクが相対的に高いとCoが判断した学生について、経年的に追跡調査し、事例研究を通して、自殺の危機状況に陥るリスク要因や影響要因について明らかにする。

対象：以下の4つの条件を全て満たす者：

研究期間中に学生相談室を利用したことがある

担当Coが当該学生の自殺リスクについて相対的に高いと判断していた時期がある

2020年3月31日以前に、卒業に伴い学生相談室での支援を終了している

事例の発表に同意している

方法：事例研究

調査内容：事例の背景情報と経過中の面接記録。

## 4. 研究の成果

全体の研究の進捗状況としては遅れている。調査とHR者に対する呼出面接は予定通り実施し、必要なデータは揃っており、目下、収集したデータを整理し、分析作業を進めている状況である。以下では、これまでの研究成果について報告し、今後の見通しを説明する。

### 研究1 こころの健康調査

(1) 論文 「こころの健康調査」を用いた心理支援ニーズを有する学生の掘り起こしと電話・面接によるアウトリーチ型支援の試み. *Campus Health*, 2018; 55(2): 70-76.

本稿では、2016年度に北里大学相模原キャンパスで全学部生を対象に実施したこころの健康調査と、HR者に対するアウトリーチ活動の実践について、「事前準備」「こころの健康調査」「アウトリーチ活動」の3つの時期に分けて報告した。北里大学におけるスクリーニング調査の実際と2016年度の結果について報告し、大学が全学的にスクリーニング調査を行う意義、注意事項、今後の課題について考察した。

(2) 論文 「こころの健康調査」からわかる心理支援を要する可能性が高い学生の心配事の特徴. *Campus Health*, 2019; 56(2): 178-184.

本稿では、2016年度に北里大学相模原キャンパスで全学部生を対象に実施したこころの健康調査で、HR者の心配事の特徴と、陽性判定に関連する要因について検討した。心配事全9項目(勉強、将来進路、性格適性、友人異性関係、専攻違和、教職員関係、家族、健康、経済問題)

において、**HR** 者が非 **HR** 者に比べて有意に得点が高かった ( $p<.01$ )。 **HR** 者に関連する因子として、全体では『性格や適性』『医療系/非医療系』『専攻違和感』『友人異性関係』『将来の進路や仕事』が抽出された ( $p<.05$ )。各心配事がハイリスクにつながる背景と各心配事を抱える **HR** 者への対応策について検討した。

### (3) 2017～2019 年度に実施したところの健康調査について

当初の計画では、**2016** 年度の調査結果も横断・縦断的な比較研究に用いる予定であったが、**2016** 年度調査の結果を踏まえて、**2017** 年度以降のところの健康調査の内容の一部を修正したため、横断・縦断研究には **2017～2019** 年度の 3 年分のデータを使用することとした。

各年度におけるところの健康調査の回収数(学部在学学生数に対する回収率)、回答の研究利用に同意した実際の分析対象数、その内の **HR** 者数(陽性率)を表 1 に示す。なお、本研究の本格的な分析はこれからであり、現時点で示す数値は暫定的なものである。これから欠損データの処理等を行いデータを精緻化するため、この報告書以降に発表する数値には若干の変動が見込まれる。

表 1 調査回収数、研究利用同意数、陽性判定学生数

年度	調査回収数(回収率)	分析対象者数	HR 者数(陽性率)
<b>2017</b>	<b>4,428</b> 人 ( <b>84.6%</b> )	<b>3,954</b> 人	<b>507</b> 人 ( <b>12.8%</b> )
<b>2018</b>	<b>4,566</b> 人 ( <b>87.1%</b> )	<b>4,078</b> 人	<b>471</b> 人 ( <b>11.5%</b> )
<b>2019</b>	<b>4,590</b> 人 ( <b>87.1%</b> )	<b>4,066</b> 人	<b>398</b> 人 ( <b>9.8%</b> )

上記研究 1 の調査内容に示した①～⑧のデータは全て揃い、データクレンジング作業を終えている。これから分散分析もしくはクロス集計を実行し、学部別、学年別、性別別に比較検討する。また、縦断研究として、**2017～2019** 年度の 3 時点で測定した同一学生複数人の **K10** 得点の変化と生活習慣、基本的信頼、自尊感情、心配事との関連について、潜在成長モデルを用いて検討する予定である。

### 研究 2 心理支援対象学生 (HR 者) の呼出面接

各年度における **HR** 者(研究利用に同意した者のみ)の呼出面接の結果を表 2 に示す。「継続」は呼出面接後に学生相談室でのカウンセリングに繋がった数、「オンデマンド」は呼出面接のみで終了した数であり、この 2 つの合計数が呼出面接の実施数である。「電話で確認のみ」は、来室を希望しなかった学生に対して、電話で状態を確認した数である。

表 2 呼出面接の結果

年度	継続	オンデマンド	電話で確認のみ	来室なし連絡なし	電話への応答なし	学生相談室利用中	連絡先不明
<b>2017</b>	<b>58</b> 名	<b>150</b> 名	<b>104</b> 名	<b>32</b> 名	<b>106</b> 名	<b>32</b> 名	<b>25</b> 名
<b>2018</b>	<b>52</b> 名	<b>163</b> 名	<b>64</b> 名	<b>76</b> 名	<b>64</b> 名	<b>37</b> 名	<b>15</b> 名
<b>2019</b>	<b>72</b> 名	<b>121</b> 名	<b>75</b> 名	<b>35</b> 名	<b>65</b> 名	<b>25</b> 名	<b>5</b> 名

呼出面接を行なった **Co** は、面接終了後に「自殺・自傷他害リスク」「学生の継続相談ニーズ」「心理支援必要性の **Co** 判断」について 5 段階評価を行い、精神科校医や医療機関を紹介した場合はその結果を記録しており、分析に必要なデータは揃っている。今後は、実際にカウンセリングに繋がった「継続」の学生の特徴について、分析作業を進めて行く。

### 研究 3 心理支援を要し、かつ、自殺の危機状況を体験した学生の追跡調査

研究代表者が担当し、前述した 4 つの条件に当てはまる事例は、現時点で 3 名である。内 2 名は、ところの健康調査に基づく呼出面接から継続的なカウンセリングに繋がり、その後、ある程度の危機を経験しながらも、支援を通して希死念慮が消失し、終結に至った事例である。今後は、各事例について、ところの健康調査から得られたデータと面接経過から得られたデータの両面から分析を行う予定である。

### 引用文献

- 1) 日本学生相談学会. 学生の自殺防止のためのガイドライン 2014; <http://www.gakuseisodan.com/wp-content/uploads/public/Guideline-20140425.pdf> [閲覧日: 2018 年 1 月 13 日]
- 2) 高野明, 宇留田麗. 援助要請行動から見たサービスとしての学生相談. 教育心理学研究 2002; 50: 113-125.
- 3) 独立行政法人日本学生支援機構「大学等における学生支援の取組状況に関する調査(平成 27 年度)」 [http://www.jasso.go.jp/about/statistics/torikumi\\_chosa/\\_icsFiles/afieldfile/2017/02/14/h27torikumi\\_chosa.pdf](http://www.jasso.go.jp/about/statistics/torikumi_chosa/_icsFiles/afieldfile/2017/02/14/h27torikumi_chosa.pdf) [閲覧日: 2018 年 1 月 13 日]
- 4) 山田裕子, 拓殖道子, 寺嶋あゆみ他. 大学新入生のメンタルヘルスと呼び出し面接方法及びその後の学生相談室利用との関連. Campus Health, 2012; 50(1): 432-434.

- 5) 山田裕子, 守屋達美. 「こころの健康調査」を用いた心理支援ニーズを有する学生の掘り起こしと電話・面接によるアウトリーチ型支援の試み. **Campus Health, 2018; 55(2): 70-76.**
- 6) 古川壽亮, 大野裕, 宇田英典, 他. 一般人口中の精神疾患の簡便なスクリーニングに関する研究 平成 14 年度厚生労働科学研究 費補助金(厚生労働科学特別研究事業)心の健康問題と対策基盤の実態に関する研究協力報告書 **2003.**
- 7) 大野裕 (主任研究者). 平成 11-12 年度厚生科学研究費補助金障害保健福祉総合研究事業「うつ状態のスクリーニングとその転機としての自殺予防システム構築に関する研究」総合研究報告書 **2002.**

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 山田裕子・守屋達美	4. 巻 56(2)
2. 論文標題 「こころの健康調査」からわかる心理支援を要する可能性が高い学生の心配事の特徴	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Campus Health	6. 最初と最後の頁 178-184
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 山田裕子、石塚昌保、大町知久、河原久美子、田中あゆみ、山崎綾乃、坂井清香、守屋達美	4. 巻 55(1)
2. 論文標題 北里大学相模原キャンパス全学生対象「こころの健康調査」アウトリーチ活動の実践	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Campus Health	6. 最初と最後の頁 302-304
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 山田裕子、石塚昌保、大町知久、河原久美子、田中あゆみ、立花氷、小谷真穂、守屋達美	4. 巻 57
2. 論文標題 K10項目と属性との関連からみたA大学新入生の精神健康の特徴：3年間の比較から	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Campus Health	6. 最初と最後の頁 245-245
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 山田裕子・守屋達美	4. 巻 55
2. 論文標題 「こころの健康調査」を用いた心理支援ニーズを有する学生の掘り起こしと電話・面接によるアウトリーチ型支援の試み	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Campus Health	6. 最初と最後の頁 70-76
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 山田裕子・石塚昌保・大町知久・河原久美子・田中あゆみ・井上尚代・守屋達美	4. 巻 56
2. 論文標題 「こころの健康調査」からわかる心理支援を要する可能性が高い学生の特徴	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Campus Health	6. 最初と最後の頁 352-352
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件(うち招待講演 0件/うち国際学会 0件)

1. 発表者名 山田裕子、石塚昌保、大町知久、河原久美子、田中あゆみ、立花氷、小谷真穂、守屋達美
2. 発表標題 K10項目と属性との関連からみたA大学新入生の精神健康の特徴：3年間の比較から
3. 学会等名 第57回全国大学保健管理研究集会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 山田裕子・石塚昌保・大町知久・河原久美子・田中あゆみ・井上尚代・守屋達美
2. 発表標題 「こころの健康調査」からわかる心理支援を要する可能性が高い学生の特徴
3. 学会等名 第56回全国大学保健管理研究集会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 山田裕子・石塚昌保・大町知久・河原久美子・田中あゆみ・山崎綾乃・坂井清香・守屋達美
2. 発表標題 北里大学相模原キャンパス全学生対象「こころの健康調査」アウトリーチ活動の実践
3. 学会等名 第55回全国大学保健管理研究集会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 山田裕子・石塚昌保・大町知久・河原久美子・田中あゆみ・山崎綾乃・坂井清香・守屋達美
2. 発表標題 全学的「心の健康調査」から探る大学生ハイリスク群の特徴 主に学年間の差異に着目して
3. 学会等名 日本心理臨床学会第36回大会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担 者	守屋 達美  (Moriya Tatsumi)  (50191052)	北里大学・健康管理センター・教授    (32607)	